

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-141	A-162	13-098
滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門		
題名 (原題/訳)		
Predicting persistency of DSM-5 alcohol use disorder and examining drinking patterns of recently remitted individuals: a prospective general population study. アルコール使用障害(DSM-5 で診断)の持続性の予測と、最近、寛解した者の飲酒パターンの調査：前向き一般集団研究		
執筆者		
Tuithof M, Ten Have M, van den Brink W, Vollebergh W, de Graaf R.		
掲載誌		
Addiction. 2013 Dec;108(12):2091-9. doi: 10.1111/add.12309.		
キーワード		PMID
アルコール使用障害(AUD)、持続性、予測因子		23889861
要 旨		
目的：		
アルコール使用障害 (AUD) の 3 年間持続率とその予測因子の確立と、最近 AUD が寛解した者の飲酒パターンを調査することを目的とした。		
方法：		
国民代表集団の成人 (18～64 歳) からなる Netherlands Mental Health Survey and Incidence Study-2(NEMESIS-2)において、ベースライン時 (応諾率 65.1%) と 3 年後 (応諾率 80.4%) の二回調査した。ベースラインにおいて DSM-5 で AUD と診断された 198 名を対象とした。AUD、飲酒パターン、精神疾患については、Composite International Diagnostic Interview 3.0 を用いて評価した。その他の予測因子は、追加の質問票にて評価した。AUD 持続性の予測因子は単変量および多変量ロジスティック回帰分析にて解析した。		
結果：		
AUD の 3 年持続率は 29.5% (95%信頼区間(CI) =20.0～39.0) であった。多変量モデルにおいて、若年のグループ (18～24 歳) に比べて壮年・中年のグループ (25～34 歳および 35～44 歳) で AUD 持続率はより低かった (それぞれ、オッズ比 OR=0.05、95%CI=0.00～0.49 および OR=0.14、95%CI=0.02～0.79)。週の飲酒回数の多さおよび不安障害の合併が、AUD の持続性と関連した (それぞれ、OR=1.03、95%CI 1.00～1.07 および OR=4.56、95%CI 1.04～20.06)。さらに寛解は、ベースライン時と 3 年後追跡時の間で、週 6 杯以上の飲酒量の減少と関連していた。しかし、寛解したと診断された者の 35.8% (95%CI=22.4～49.2) が推奨上限量 (女性で週 7 回、男性で週 14 回) 以上に飲酒していた。		
結論：		
オランダでは DSM-5 定義の AUD と診断された者のうち少数が 3 年後も継続していた。AUD が持続は、若年、週の飲酒回数の多さおよび不安障害の合併である。最近 AUD が寛解したと診断された者でもなお推奨上限量以上に飲酒していることが分かった。		